

地域を越えた歴史文化の視点

## 30. 塩の道

### 【ストーリー】

赤穂では、弥生時代終末期から土器製塩が行われていた。その後、塩田を構築する技法が確立してくると、晴れの日が多く、遠浅の海が広がり、干満の差が激しいなどといった条件を備えた、赤穂を含む瀬戸内海沿岸が塩づくりに最も適した産地として栄えた。

赤穂では、平安時代にすでに東大寺の荘園として塩田が経営されはじめ、江戸時代に入ると池田家が塩田干拓に着手した。その後は浅野家によって主に東浜塩田の本格的な開発が行われ、続く森家時代になると西浜塩田が開発されるなどして塩

田面積は拡大していった。塩田干拓は近代まで積極的に行われ、昭和 10（1935）年には東浜、西浜あわせた塩田面積 367.2ha を誇った。

近世の入浜塩田は、近代になると流下式塩田に転換し、さらにイオン交換膜による化学製塩の実現によって、塩田は廃止された。

江戸時代から近現代に至る生産関連の遺構はもとより、塩の生産、販売にかかわる輸送関連の遺構も多く見ることができ、まさに「塩の道」をたどることができるのが、赤穂の特徴である。



**高瀬舟船着場跡**  
千種川沿いの上高谷に設置された船着場は、千種川と坂越湾とをつないだ。



**坂越大道**  
高瀬舟の船着場から坂越湾とをつなぐ大動脈で、現在も歴史的なまちなみが残されている。



**黒崎墓所**  
全国各地の水夫らの墓地。墓石が故地から運ばれたものもある。



**千種川河口部**  
河口部には赤穂城と城下町があり、高瀬舟が行き来した。



**旧日本専売公社赤穂支局**  
明治 41（1908）年に建築された建築で、現在は民俗資料館となっている。



**塩の国の復元塩田**  
兵庫県立赤穂海浜公園内にあり、現在も枝条架による塩づくりが行われている。



**塩倉庫・製塩工場跡**  
東浜塩田の製塩工場跡。現在は塩倉庫の一部が残る。

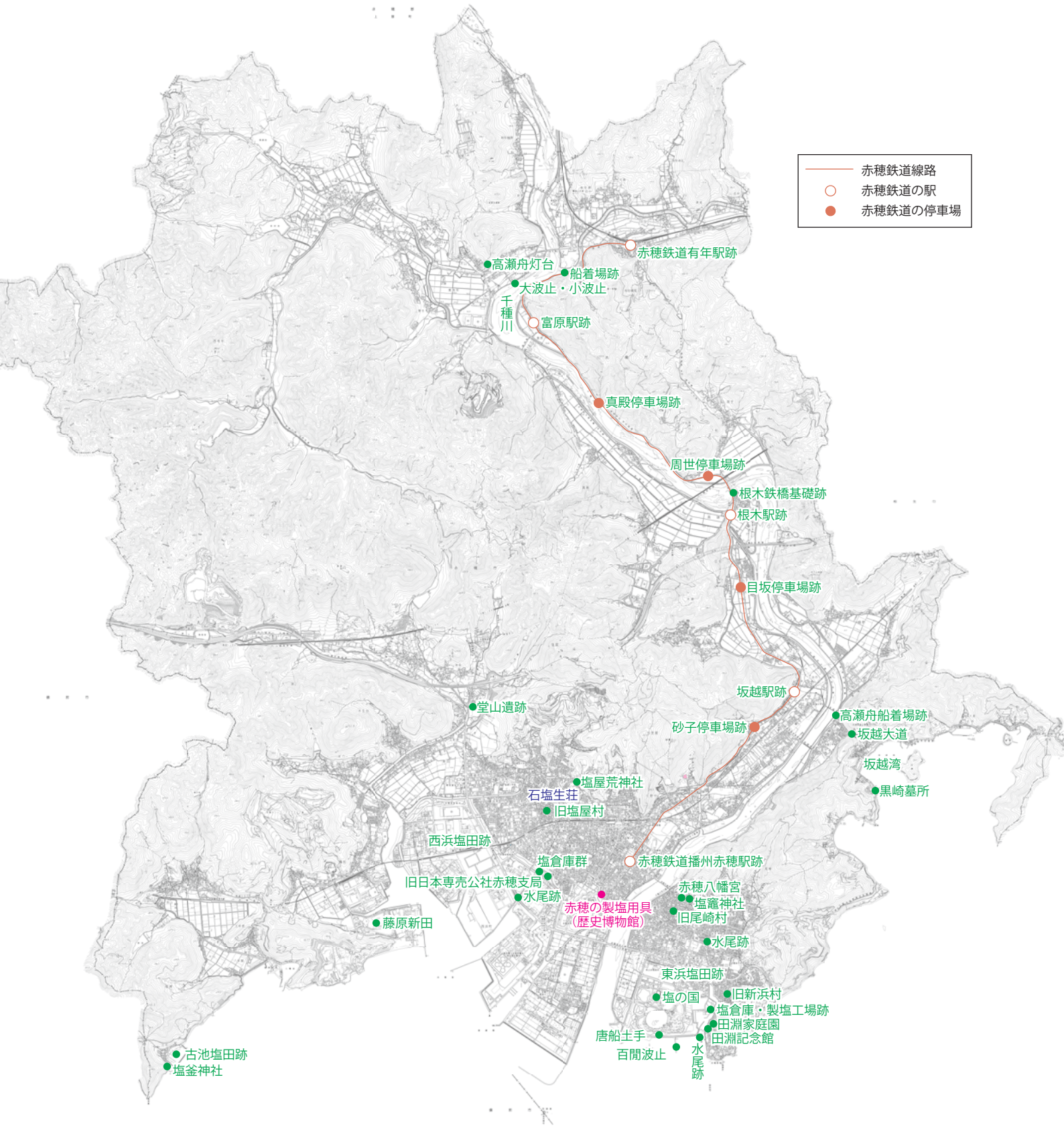


**古池塩田跡**（撮影：出水伯明）  
文政 6（1823）年完成の塩田で、昭和 46（1971）年の廃止後、そのまま残されている。

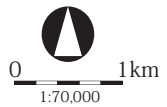


**廻船模型**（赤穂市立歴史博物館）  
坂越を中心とし、赤穂の塩運送などに利用された。実物の 3分の1 模型。





- 赤穂鉄道線路
- 赤穂鉄道の駅
- 赤穂鉄道の停車場



- 凡例 ●もの ●場 ●こと